

コロナ禍における地域連携 PBL 授業 (3)

—— 3年目の学生評価／インタビュー調査から ——

岩佐 淳一*・神田 大吾*・鈴木 敦*

(2023年10月23日受理)

The PBL-Based Projects Seminar in 2022 (3): Its Evaluation by Students

Junichi IWASA*, Atsushi SUZUKI*, Daigo KANDA*

キーワード：コロナ禍、PBL 授業、プロジェクト演習、学生評価

茨城大学人文社会科学部専門科目「プロジェクト演習」は、大学外の人々や組織・団体・行政機関などとの連携を通して、社会人基礎力養成を目指す地域連携PBL授業である。コロナ禍が始まった2020年度から本授業では質問紙やインタビュー調査を通じて各年度の学生による独自の授業評価を行うことで、PBL授業におけるコロナ禍の影響を調査してきた。

本稿では履修学生の授業評価をもとにプロジェクト演習(PBL授業)に胚胎するさまざまな問題点や課題を明らかにした。PBL授業は一定の活動成果が得られることから、学生にとって大きな達成感や満足感が得られるとともに大学における学習活動の大きな個人的成果ともなってきた。こうした達成感や成果の一方で、これまで11年間のPBL授業で顕在化してこなかった諸問題、すなわち、学期初めに選択課題を比較検討する方法や時間の不備、授業時間外における広義の「学習時間」の長さに対する負担感、チーム構成員相互の活動量(時間)の差とそれに起因する不公平感、チーム相互間の相互交流・情報交換の欠如などPBL授業にまつわる本質的な問題4点が浮き彫りとなった。

これまでの知見と問題の所在

茨城大学人文社会科学部の専門科目であるプロジェクト演習は、「学生に、地域の方々との緊密な連携の下に地域の中での活動を柱として自発的に学ぶ場を提供する、地域連携PBL(project based learning)授業」である。しかし2020年度初頭以来3年余にわたるコロナ禍を受けて、特に前半の2年間は「地域に出て行くこともままならない、リモートベースの地域PBL授業」というパラドク

*茨城大学人文社会科学部

シカルな運営を強いられた。この問題は現在もなお、完全には払拭されていない。

この間、担当教員3名は、コロナ禍を『非常時ならでは』の知見を得られるチャンス』とポジティブに捉え直し、各年度末に検証作業を行ってきた。具体的には以下の通りである。

(1)2020 年度末

コロナ禍を受けて、いわゆる「リモート授業」(オンライン授業)が急速かつ広汎に採用されることとなった。そこで地域連携PBL授業におけるリモート化(オンライン化)のデメリットとメリットについて学生の評価を通して検証することを目指し、「履修学生全員を対象とした質問紙調査」と「2年以上継続して履修した若干名を対象としたグループインタビュー調査」の2種類を実施した。

特にメリット部分に注目して整理した結果、①「コミュニケーション」という言葉で想起される内容の多様性、②「地域連携PBL授業における『不要の要』の重要性」、③目の前のコロナ禍対応における授業運営上の留意点、④今後のリモート化の進展をにらんでの授業運営上の留意点等について基礎的な知見を得ることができた¹⁾。

(2)2021 年度末

コロナ禍も2年目となり、学生、教員、大学はもとより社会全体が一定の「経験値」を獲得しつつあった。そこでこれを「コロナ禍初年度との比較検討を行う機会」と捉え、2020年度末の調査を基本的に踏襲すべく、2021年度末に履修学生全員を対象として「質問紙調査」と「グループインタビュー調査」という2種類の調査を行った。

このうち「履修学生全員を対象とした質問紙調査」では、思いがけず所期の回答率を確保できないという事態に陥り、残念ながら分析を断念せざるを得なかった。一方で「グループインタビュー調査」では予想以上に活発なやり取りがなされており、質問紙調査への反応と好対照を見せた。その結果、2020年度調査で発見された「対面による親密性の高まりが、議論の深まり、ひいてはプロジェクト演習の成功と学修成果の手応えに大きく寄与していること」を改めて確認できた。このことはPBL授業における対面の重要性を示唆すると同時に、地域のフィールドに入ることが制限されるなかで、「対面」の効果を最大限に発揮するためには対面授業を授業のどの時期にどのようなかたちで組み込むかという授業の綿密な事前設計と、刻々と変わる状況への柔軟な対応が重要であることを示唆していると判断された²⁾。

(3)2022 年度末

コロナ禍も3年目となって「with コロナ」が常態化する中で、過去2年間に続けて「グループインタビュー調査」を行うことで、地域連携PBL授業におけるリモート化のデメリットとメリットについて継続的な比較検討を行うことを目指した。

その結果、リモート化のデメリットとメリットについて所期の分析結果が得られたのみならず、思いがけずPBL授業に胚胎する問題に関する知見も得ることができた。そこで、リモート化のデメリットとメリットに関する分析結果については別稿を立てて論ずることとし、本稿では専らこの「PBL授業に胚胎する問題」について論ずることとした。こうした背景から、本稿においてはPBL授業としてのプロジェクト演習を履修学生がどのように評価したのか、次年度の授業に対してどのような要望を持ったのか、その評価点、授業の改善点、要望の全体像を明らかにすることで今後のPBL授業の発展的展開を模索することを目的とした。(鈴木敦)

1. 調査の概要

以下、分析に使用するデータについて説明する。2022年度のプロジェクト演習では4つのチームが編成され、それぞれ7か月～9か月間活動を行った。

1-1. 各チームの概略

(1) さとみ・あいチーム(以下、さとみ・あいと略す)

さとみ・あいチームはプロジェクト演習が立ち上がった当初から活動が継続している設立11年目の老舗チームである。3年次生7名で構成され、うち4名は2年次にも同チームに所属しており、前年度の成果を踏まえてチームの目標が設定された。チームの目標は里美地区の魅力を発見し広報することで、具体的には里美地区の「マップ」づくり、SNSを使った情報発信、地区で開催される「味覚祭」や茨城大学の学園祭である「茨苑祭」に出店し、地区の特産品である「里川カボチャ」を使ったコロッケを調理販売することで里美地区および特産物のプロモーションを行うことなどであった。これらの目標については十分に達成できたという年度末チーム評価だった。また、チームの内的な目標を課題解決能力や主体性、他者を巻き込む力といった社会人基礎力を身につけることに置いた。

「マップ」は5,000部を制作、授業期間内に1,000部を里美地区内、里美地区の隣接地域、福島県南部の「道の駅」などに配布した。また、テレビ朝日『食彩の王国』(2022年10月1日放送)にも出演し、活動の一部が紹介された。

(2) MPP(水戸でポタリングプロジェクト)チーム(以下MPPと略す)

MPPは水戸市役所交通政策課による提案によって立ち上がった2年次生4名、3年次生1名、計5名からなるプロジェクトで、その目標は①水戸市内の自転車利用の促進、②自転車で水戸を楽しんでもらうための環境づくり、③プロジェクトを通して水戸市市民やさまざまな店と関わることで地域の活性化に寄与すること、④水戸のまちなか活性化、⑤大学生の視点からの水戸の魅力を再発見と発信の5点であった。チームの学びの目標は、①パンフレットの作成やSNSの情報発信を通じて目的に沿った情報の適切な取捨選択ができるようになること、②情報の効果的な発信方法を学ぶことの2点とした。

チームの活動は①ポタリングコースの設定、②パンフレットやマップの制作、③PR動画やSNSによる情報発信などの具体的な成果として結実した(パンフレット、マップの配布は授業終了後に行われ、MPPの活動は水戸市報『広報みと』6月1日号の巻頭を飾った)。

(3) 茨城大学チームこみフェス(以下、こみフェスと略す)

こみフェスは2年次生2名、3年次生3名、計5名で編成されたチームである。チームの活動は水戸市が2013年度から行っている「こみっとフェスティバル」(市内で活動するNPOや市民活動団体間の交流および市民に活動を知ってもらうことを目標に行っているイベント)に参加しイベントの運営を支援することであった。チームの内的目標としては、①社会人としての基礎的なスキルを身につける、②Twitter、Instagramを利用したこみフェスの広報を行うこと、③自分自身の考えに

基づいて発言ができるようにすることの3つが掲げられた。

活動内容は月1回開催された「こみっとフェスティバル実行委員会」への参加・討論・開催準備、高校生のJRC(Junior Red Cross=青少年赤十字)部との交流を企図した「ふれフェス」(2023年1月18日実施)の開催、2023年2月18・19日に水戸市内原イオンモールで開催された「第11回こみっとフェスティバル2023」への参加、フェスティバルの運営の手伝い、SNSでの情報発信などを行うことで、チームの活動については当初の目標を達成したとの自己評価だった。また、本チームの活動も地元ラジオ局の番組出演を通じて広く県民に周知されることとなった。

(4) アーストラベルチーム(以下、アーストラベルと略す)

アーストラベルは、2年次生3名、3年次生3名、計6名で編成されたチームである。複数の中学校から株式会社水戸アーストラベルに対してコロナ禍で中止になった「職場体験」の代替活動について相談があり、株式会社アーストラベルからインタビューをもとにした「仕事人図鑑」の作成について大学生と共同運営したい旨提案があったことから本プロジェクトチームが結成された。

プロジェクトの目標は①インターネットでは得られない仕事「人」に関する情報を知ってもらう、②インタビューを通じて地域に愛着をもってもらう、③中学生に将来のイメージを具体的に考えてもらうきっかけとする、④ライフキャリアを考える材料にもらえるような図鑑とする、の4点であった。一方、活動によるチームの学びの目標としては①社会人基礎力の育成、②「地域で働く人への理解・関心」を深めること、③チーム間連携の円滑化、④よりわかりやすい言葉を用いた中学生への説明であった。活動は水戸市内および周辺市町3つの中学校で行われそれぞれの中学校で「仕事人図鑑」が制作された。また、活動は茨城県内4つのメディアで取り上げられた。

1-2. 分析データの概要

分析データの蒐集は大学の授業およびプロジェクトが概ね終了した2023年2月に行われた。それぞれのチームを受け持つ担当教員からの指示で、各チーム1時間程度、①プロジェクトを終えての全体的感想、②授業の外的成果および内的成果、③授業で良かった点改善を要する点、④オンライン授業の良い点悪い点、⑤その他授業についてのフリートークの5点についてオンラインでのインタビュー調査を行った。

この際、チームのリーダーが司会を務め、担当教員はインタビュー調査の冒頭に調査の主旨や蒐集したデータの利用方法について学生に説明することとどめ、不確かな事実関係についての学生からの質問に答えたことを除いて議論には一切参加せず、学生の議論を傍聴した。この際の音声は録音され、それらの音声の文字起こしを行った。議論は会話なので、若者特有の単語や言い回しが頻出する(たとえば他の学生のことを「子」と表現するなど)が、これらは分析に支障のない範囲内で一般的に使用される語や表現に修正した。また、語と語をつなぐ「あと」「何だろう」「その」「こう」などの言葉は今回の分析の目的には不要なので、文字起こしデータから削除した。

そのうえで、①学生の全体的な語彙および会話の量的傾向、②それぞれチームごとの語彙および会話の傾向について分析を行った(ただし本稿では紙幅の関係で①②については最小限の言及にとどめている。詳細な内容は別稿に譲りたい)。また、それぞれのチームの発話内容から、学生たちが授業をどのように受け止め、何を今後の授業(プロジェクト演習)課題としているのかについて分析を行った。「若者ことば」的な表現は一般的な表現に修正し、敬体を常体に変更を加えたが、文意を

損なう修正は行っていない。

2. 学生の振り返りインタビュー調査のなかで使用された語彙

授業の振り返りインタビュー調査において各チームが使用した語彙を量的に集計したものが表 1 である。

表1 インタビュー調査で使用された語彙

順位	さとみ・あい		MPP		こみ・フェス		アーストラベル	
	語彙	頻度	語彙	頻度	語彙	頻度	語彙	頻度
1	良い	94	自分	40	チーム	45	良い	54
2	チーム	56	オンライン	26	良い	40	時間	42
3	人	55	感じ	26	人	37	他	42
4	オンライン	32	良い	26	活動	33	成果	29
5	授業	30	授業	25	オンライン	30	授業	26
6	対面	30	活動	23	対面	25	人	26
7	活動	28	本当に	23	授業	21	自分	25
8	成果	23	人	20	こみフェス	20	グループ	24
9	里美	21	コミュニケーション	19	見る	17	活動	21
10	機会	20	参加	16	ふれフェス	16	オンライン	19
11	悪い	19	対面	15	自分	16	経験	18
12	時間	19	今	14	成果	16	対面	17
13	自分	19	後悔	12	他	16	チーム	16
14	他	17	話	12	たくさん	14	中学生	15
15	行く	16	グループ	11	悪い	14	発表	15

まず、10位以内で出現する共通語彙についてみると、「良い」「オンライン」「人」「授業」「活動」などの語彙の出現頻度が各チームとも高くなっている。15位までとすると「対面」の語彙が共通に言及された語彙として入ってくる。また、MPP チームを除いて、「成果」の語も15位以内で言及されている。これは、教員側が授業の外的・内的成果や授業で良かった点改善を要する点、オンライン授業の良い点悪い点についての議論を求めたことによるものでいわば当然の結果である。

一方、出現語彙にはチームごとに差異も見られる。アーストラベル、MPP には「自分」という言葉が上位にランクされ、アーストラベルでは「時間」「コミュニケーション」という他のチームでは

出現しない語彙がしばしば使用されている。この2チームは2022年度に初めて結成されたチームである。一方、以前から共通のチーム名で活動を継続させているこみフェス、さとみ・あいの2チームは「チーム」という語彙がきわめて高い頻度で出現している。おそらく、新しくできたチームほどチーム活動を行う準備としての人間関係の構築に時間がかかったと思われる。この点、古いチームはそれらの構築に要する時間がかからなかったことがチーム間で出現語彙が異なる原因と思われる。

具体的にアーストラベル、MPP 両チームが「自分」という言葉をどのように使っているかを見ると、両チームとも「自分」を「自分たち」という意味で使用している。これはチームと意味的には似ているものの、こみフェス、さとみ・あい両チームが、活動をチームという全体のなかでとらえているのに対して、アーストラベル、MPP は自分を起点とした「個の集積体」としてとらえていることによるものと考えられる。このようにチームの新旧がその学生間の結合のありかたに影響を与えている可能性が垣間見られた。アーストラベルで言及数の多い「時間」については後述する。

3. 授業の外的内的成果

履修学生は授業の成果をどのように捉えたのであろうか、以下ではこの点について考察したい。なお、以下で使用する外的成果とは①授業において大学外に明示的に示すことができた具体的成果「物」や「実践」、②個人やグループが学んだプロジェクト遂行のためのスキル(技術)、③大学外の人々と構築された「関係」を指すものとする。内的成果とは、成果として語られた発話のうち、チームメンバー相互または個人の心理的な成長にかかわる側面を指すものとする。

3-1. 授業の外的成果

前述したように、各チームはチーム結成の初期段階で成果物というかたちでの目標設定、チーム内部での学びの目標を立てて活動を行った。結果として4チームすべてにおいて成果物が提出された。こうしたことから、各チームが成果物の提出を外的成果として指摘しているのは当然であるが、他の外的成果としては「チームで活動することの学び」と「さまざまなスキルの獲得」に大別できた。

前者ではチームワークやチームで他者を見ながら積極的に動く力がついたことが学生から指摘されている。義務教育や高等学校でもクラス活動や課外活動のなかでチームワーク、チームで活動する力については一定の学びが行われてきたと考えられる。大学以前の学校経験とプロジェクト演習のチームワーク、チームで活動する力とではどこが異なるのであろうか。履修学生はそれを「責任の重さ」と表現している。大学以前の学校種では、チームや部活で活動した際、たとえ成果物や結果が出せなくても活動それ自体が学びとされ、最終的には教員の助力が得られたという。しかし、プロジェクト演習ではチームで活動や目標達成への自己管理が行うことが求められ、教員は、助言は行うものの成果物の提出に「手出しをしないこと」から学生にとって活動はほぼ未知の経験となる。アーストラベル、MPP、こみフェスに典型的なように、行政や企業という期日までに成果物を出すことがアプリアリとされる組織と連携することは単なる学びを超えた「重い責任」を伴うこと

となる。このことがプロジェクト演習と大学以前の学校種でのチームワーク経験を切り分けていると考えられる。こうしたこともプロジェクト演習が社会人養成の授業である所以となっている。一方、この責任の「重さ」は学生にとって大きなプレッシャーとなり、活動遂行のために他の授業との時間調整に困難をきたしたり、メンバー間の業務負担の不公平感が出来たりという問題につながっていくこととなった(4で詳述)。

後者のさまざまなスキルの獲得についてはメール技術、文面でのやり取りの方法、プレゼンの経験・方法、スケジュールの立て方、対面でのコミュニケーション、リーダーやメンバーとしてのチームの回し方・手順・計画性、「ほうれんそう」の習慣などが挙げられている。これらのスキルのいくつか、たとえば、スケジュールの立て方、メールの技術・文面でのやり取りの方法などは大学入学後の早い時期に指導されてしかるべきと考えられるが、未だ十分な目配りが行われていない部分である。大学の役割がこれまでのアカデミズムを超えるようになった現在、プロジェクト演習で履修学生が獲得したような諸スキルを学生にどのように伝達していくのかについても考えていくことが必要であると考えられる。

3-2. 授業の内的成果

活動で得られた内的成果については①経験それ自体、②成果を出せたある種の満足感、③チーム活動で得られた信頼感の醸成を挙げることができる。経験では社会経験、通常の大学の授業ではできない経験、チームで協力するという経験など活動におけるさまざまな経験が履修学生にとって「成果」や「満足感」として認識されている。また、信頼感の醸成もチーム活動の基礎基盤としてきわめて重要であるが、こうした信頼についての言及も見られた。

4. 授業で良かった点改善を要する点

4-1. 授業で良かった点

次に授業で良かった点について言及する(表2)。これらの項目は前述、授業の外的内的成果と重複している記述もあるが、学生の発話を尊重しながら内容を見ていきたい。

授業で良かった点として学生が指摘したのは、PBL 授業に特徴的な諸経験であった。それは①フィールドワーク、②大学外部との交流、③他学科・異学年次生との授業を通じたチーム活動、④授業が学生自身の自主活動である点、⑤①～④を通年で行うこと、である。これらの経験は、大学内では希少な経験であった可能性がある。コロナ禍による3年間は少なくとも①～③の活動に関してはほとんどできない、あるいは活動が制限されてきた。特に3年次生はこれらの経験をほとんど積むことができなかった。こうしたコロナ禍が学生の授業評価に反映されているものと考えられる。また、グループワーク授業という点からみると、現在の大学の教育体制は自身が専門とする学科(課程)とゼミに収れんするため、異学科の学生の混合体による教育活動ができにくい状況である。さらにゼミとは異なったかたちでの異学年混合の長い時間をかけた学びとなるとほとんど見ることにはできないであろう。こうした経験を学生は「新鮮」で「充実感」あるものと評価したものと考えられる。

表2 授業で良かった点

チーム名	項目
さとみ・あい	いろいろな人と知り合え授業という枠組みの中で交流を深められた。
	フィールドワークが多くできた。
	プレゼン講座が良かった。
	社会と関わる機会を授業の一環としてもらえることができた。
	ガクチカとして単なる見栄えではなく、確固たる経験としてのガクチカになったということが良かった。
	いろんなところから学びのアプローチがあった。
	いろいろな人と関わる機会が本当にあった。
	大学のネームブランドを借りることができた。
	マナーや礼節を学べた。
MPP	授業で良かった点は放り出される感じではないか。これがこの授業の醍醐味というか、この授業を学生たちが受け、自分たちの力と少しは大人のカも借りながらやり遂げていくということが授業の主旨で、放り出されて迷ったとして、「こうしなさい」というのではなく、ではどうすれば良いかという答えではなく、選択肢を一緒に考えてくれるという点は授業の進め方という点では本当に良かった。
こみフェス	外部の人と交流できた。多くの人々と関わる事ができた。
	1つのプロジェクトを成し遂げる大変さ、楽しさを知ることができた。
	長い期間をかけて、1つの大きなことを達成するという、成功体験に近い大きな充実感が得られた。
	多くの人と関わる事ができた。
	自分たちのグループと他のグループを比較しながら、他のグループの良い点も見ながら活動ができた。
	ガクチカは手に入ったし、ガクチカ以上のもの、思い出などが手に入った。
	他のチームがこうやっているから僕たちも頑張らなければというモチベーションの維持ができた。
	学生の主体性がすごく保たれていた。
	いろいろな人と関わる機会を持てた。
	教員が活動の現場に来てくれた。
アース トラベル	フィールドワークやグループ活動が多いので、社会人になった時に実際に生かせそうな実践的な学びがあった。
	プロジェクト演習に参加しなければ絶対に経験できなかった経験をした。
	学年の違う人とずっと一緒に活動してきたというのが個人的に大きな良かった点だった。先輩としてふるまうことの責任感みたいなものもあったし、後輩が単純にいるといううれしさもあった。1つ下の学年と一緒に活動できたというのが良かった。
	他の学年、学科の学生と1つになって1つのものをしていくということは大変新鮮だし他の授業だとほとんどない。
	他学科とか他学年とかがもう織り交ざってやる対面の通年授業っていうのは本当に新鮮で、少し諦めていた経験をできたのが良かった。
実際に中学校に行くというのは、人文はなかなか機会がないので、貴重な経験を積めた。	

4-2. 授業で改善を要する点

以下では授業で改善を要する点として学生がどのような点について言及したのかについて考察する。履修学生が指摘した内容は、ある決められた曜日校時に、指定された教室で行われ、90分という時間枠で行われる「通常の授業」とは異なるプロジェクト演習(PBL 授業)特有の形式に多くかかわっている。それらの特徴は以下のとおりである。

- (1) 授業の内容や到達目標は通常、担当教員が決定するが、プロジェクト演習では基本的には外部の課題提案者やチームの学生自身が決定する。
- (2) チームによる活動である(プロジェクト演習では5名以上としている)。チーム内では目標達成に向けて全員の貢献が求められるとともに、必ず何らかの役職(リーダー・副リーダー・書記・渉外など)を担当し、それぞれの業務を引き受けなければならない。
- (3) 活動は通常の授業形式とは異なる時間、たとえば土日に行われるケースも多い。年4回(年度末報告会を含む)、活動状況について全体発表報告を行う。
- (4) 通常の授業形式を取る場合もあるが、多くの時間はチームの自主的な時間設定に任される。チーム活動によって①定期的・臨時のミーティング(オンラインを含む)、②ミーティングのための相互の時間調整、③連携している外部との相互連絡や協力依頼、④主として授業を担当している教員への定期的な連絡⑤教員への相談、協力依頼、といった業務が生じる。(4)の業務はチーム学生の授業時間外に行われ、都合により夜や土日の行われることもある。
- (5) 決められた期限までに外的な成果の提出ないし提示が求められ、外部の傍聴者や大学内外の関係者が出席する年度末報告会での発表が義務づけられている。

このような授業形式は履修学生に通常の授業とは異なった相応の負担を生むこととなる。特に、活動が夕方から夜に及んだり、始終チーム内学生や教員とメール等で応答をしなければならないという状況、土日にも活動が行われるなどの特異な授業形式は学生に以下のような影響を与えると考えられる。

- ・学生のプライベートな時間を侵蝕する。
- ・他の授業(含ゼミ活動)の予復習に影響を与える。
- ・他のPBL 授業や学外活動との両立が困難になる。
- ・特に3年次のインターンシップ活動に影響を与える。
- ・アルバイト時間との兼ね合いに影響を与える。特に経済的困難を抱える学生には履修のハードルが高い授業形式となる可能性がある。
- ・長い期間、たとえば留学や長期研修を希望する学生には不向きである。

これらの影響について、学生はそれ以上の魅力やメリットを感じて納得のうえでプロジェクト演習という授業を履修していると抗弁することもできるが、こうした「影響」が及ぶ可能性についてこれまで授業開講時に十分な説明を行ってきたとは言い難いというのもまた事実である。

表3 授業で改善を要する点

チーム名	項目
さとみ・あい	メールでのやり取りの分担。
	1 回得たパワポを作る知識とかは2 年間やらなくても良い、他のことをやっても良い。
	引き継ぎがないと大変。
MPP	1 限の授業が死ぬほど嫌だった。
こみフェス	大学3 年次生はきつい、時間的に負荷がたいぶかかる。
	中間発表会、年度末発表会とか後半の発表までこれからやることの発表になってしまった。
	前年度の活動を実際にした人の声が聞こえなかった。
	メンターの人と交流する機会がなかった。
アーストラベル	1 人1 人がこの授業にかけられる時間が違うので、それをグループのメンバーがこうではないかと推測しながら他の人の分を補わなければならないということが気持ち的にも大変な部分だった。
	個人的には重い授業だったというのが本音、グループで活動している分、誰かが参加できなくなると、その分、誰かが負担しなければならないようなことになってしまうので、結果的に全員が手を抜くことが許されないみたいな状況になった。そこに関してプレッシャーを感じてしまう、プレッシャーを感じやすい授業になってしまっている。参加しづらさをどこか感じてしまう授業になってしまっている。
	ミーティングの時間が長くなり、それぞれに負担がかかってしまったのが、責任というか大変な授業だった。ミーティングの時間が長くなることもグループの責任になるのか、グループでもっと工夫すればというふうに見えるのか、終わらなかつたらミーティングの時間は伸びてしまうし、それで他の講義の勉強の時間も取られてしまっている。
	いちばん最初の方のグループを選択する時の時間が足りないと思った。このグループで良かったのかなという不安があった。
	プロジェクト進めていく上でどうしてもその負担が偏る時期とかが出てしまって本当にもどかしかった。
	プロジェクトの締め切りがあるからやらなければならない生活リズムが乱れてしまった。
	メールの応答が活動時間にならない。文章を考えたり送り先を確認したり、結構頑張っても活動時間にならないので評価に加算されない。
	プライベートの時間が侵蝕される。
	他のプロジェクトが発表会などで発表していなかったところをもう少し聞いてみたかった。

まず、グループを選択する時の時間が足りない、このグループで良かったのかなという不安があったとの指摘があった。グループ選択については年度始めの開講時に課題提案者(学生自身の場合もある)からそれぞれ立てたいプロジェクトについて説明と質問を受け付ける機会を1 コマ設けている。しかし、他の学生が質問しているあいだに自分が質問する時間がなくなり、質問したいことをまとめきれないうちに時間が過ぎ、十分な吟味なくプロジェクトを選択せざるを得なかったと学生は指摘している。したがって、前述したプロジェクト演習の授業形式が与える影響を低減するためには授業当初のプロジェクトの説明を「分厚く」する必要があると考えられる。

表3 では「大変」「重い」「プレッシャー」「負担」「責任」「負荷」などの文字が並んでいる。

プロジェクト演習を責任や負担、負荷が大きく、大変でプレッシャーのかかる重い授業ととらえている学生がいることも事実である。この点について計量テキスト分析の手法で、共起ネットワーク図を書いたところ、上記のワード群と「時間」という語彙が強く共起していることがわかった。

では「時間」のどのような要素が負担なのであろうか。学生の負担感は以下4点となった。

- ・ミーティングの時間が長い。
- ・メールやミーティング以外に時間がかかっているのにそれらが評価に反映されない。
- ・プライベートや夏休みに時間を取られる。
- ・各人のプロジェクト演習の活動にかけられる時間が異なる。

このうち、「夏休みに時間を取られる」という指摘については外部との連携によって成り立つ授業であることから、夏季休暇中に活動が行われることはいたし方がない事情もある。また、「プライベート」との関連では時間調整の結果、オンラインミーティングが深夜になったり、活動がしばしば土日に行われたりすることもある。しかしながら、担当教員はこれまで学生の活動時間やプライベートな時間の区別についてあまり配慮せずメール連絡や活動を行わせてきた。こうした時間管理のあり方、それぞれの生活時間へ注意を向けていないことが今回の授業改善要求につながっていると考えられる。

「各人のプロジェクト演習の活動にかけられる時間が異なる」というのは、以下のような意味である。

- (1) プロジェクト演習では当然、学生の活動への平等な貢献を求めるが、各学生はそもそも授業への「熱量」(学生が使用した表現、意欲の意)が異なっており、プロジェクト演習に熱心な学生もいればそれほどでもない学生も存在する。授業にそれほど熱心でない学生は別の活動に熱心に取り組んでいる場合もあり、「熱量」が高い学生との授業に対する時間のかけ方が異なる。
- (2) 授業の履修の曜日校時や履修単位数の差は、授業への参加時間へ影響する。履修授業の本数が多ければ、当然、プロジェクト演習に時間を割くことが難しくなり、授業がバッティングすることもある。
- (3) 1年のなかで、他の授業や活動がプロジェクト授業の活動遂行より忙しかつ重要性が高く、そちらに注力しなくてはならない時期があり(特に3年次生)、それらは個々の学生によって異なっている。

こうした時間に関する要因は負担感の違いや負担の公平性を巡って学生にさまざまな心理的コンフリクトを生んでいる。「時間」という視点から見ると、チーム活動に成功する可能性が高まるのは①生活時間という点で同質性が高い、②「熱量」に大きな差がない、③授業時間割がある程度共通している、④学生が行う活動の内容や時期に大きなズレがない、などの条件が揃った場合となる。このような観点から、異なる動機や異なる「熱量」、持ちあわせている時間量の差を埋めてプロジェクト授業を成功させるのは容易ではないことがわかる。これらを埋め合わせるのは、お互いの異なる事情を理解し、相互に助け合う相互の「信頼関係の構築」ということになるだろう。

5. 来年度の授業への要望

これまで、プロジェクト演習における履修学生の授業の改善点の中核が「時間」の問題にあることが明らかになった。次にこれを受けて来年度(2023年度)の授業に対してどのような要望があるかを探った。まず学生の要望を概略5つに分けて示す。

5-1. 「時間」「仕事量」に関する要望

学生の録音データからは資格取得を目指しているが、プロジェクト演習の活動によってそれに関わる授業や集中講義に参加できないことがあった、他にも自分がやりたいアルバイトや研修、趣味があったが犠牲にせざるを得なくなった、アルバイトを解雇されたなど、他の活動との両立に悩む学生の「悲痛な」声も上がっていた。履修学生からの要望は以下のとおりである。

- ・プロジェクト演習にかけられる時間は学生によって異なり、どれくらいの「熱量」で、活動に取り組めるかは授業開始時に学生は個人個人わかっているはずだから、負担量についてもチーム選択の判断指標として示してほしい。
- ・課題説明会で、もっと他のチームも知りたかった。授業開始時に学生が1年間のスケジュールを立てるにあたって、どのくらい時間が必要なのか、どのようなところとどのように関わっていくのか、どういう人を求めているのかわかると自分に合ったグループを選択できる。
- ・課題説明会時に忙しくなる時期を知りたい。「この時期は締め切りが集中して忙しくなる」、「この時期はあまり忙しくない」というような1年間の忙しさの状況が事前にわかるともっと予定に合わせて参加しやすくなる。
- ・年度末報告会の時期をもう少し遅くしたり、早くしたりしてもらえるとレポート期間とかぶらなくて、みんなで話し合いとかする時間も取りやすいので楽。
- ・忙しいってところに関しては発表会とか割とあったが、資料の作成と私たちの活動の資料の作成がかぶることがほとんどで、どっちも一緒に並行してやるってことがたくさんあって、すごく忙しい、とにかく忙しいという時期が結構多かった。そこは大変すぎるのではないかと思った。
- ・メンバーの仕事量にかなり偏りがあるチームがあった。自分の仕事量がパンクしてしまうぐらいあって、改善してほしいっていうふうに出せば良いが解決しないまま負担の大きい人が何も言わないで、そのまま背負い込んでしまっ、こんなプロジェクト演習など取らなきゃ良かったとなり、さらには後輩に向かってこの授業は取らない方がよいっていうふうになってしまう。それがすごく良くないなと思っていて。実際にそれを見てしまっ、もう告げ口みたいな言い方になると思うが、これは深刻な問題だなと思っている。機会としてはすごく良い授業なのにもったいないなっていうのがあったので、先生方に相談しやすくなるような対策や全体会のなかで他チームと交流できる場を設けてプロジェクト演習の履修者としてこう相談できるような機会があったら良いなと思った。

5-2. メンバー間の横のつながり・交流、前年度のメンバーとの交流

プロジェクト演習では学生のチーム設立が決定された後、他チームの発表を聞く機会は計4回設けている。しかし、チーム相互に交流や情報・意見を交換する機会をフォーマルに設けていない。「蛸壺」感は否めないところである。この点についても学生から多くの要望が挙がった。

- ・他のプロジェクトについてもうちょっと知りたかった。それぞれのチームがどれぐらいの時間をかけてどれぐらいの気持ちで臨んでいるのかということを知りたかった。
- ・かちっとしたイベントが多くて他のグループの交流がなかった。せっかく金曜1限に授業が設定されているので、その時はグループ関係なく、わちゃわちゃ、おしゃべりできたら良かったのかなって思った。グループのメンバーをごちゃごちゃにして意見交換会みたいのがあったらもっと良かった。他のグループと話す機会を強制的に設けてもらったら多少マシになるのではないかな。そういうことがあったら自分たちの活動の励みにもなる。
- ・報告会だとしても一方的になってしまうので、もう少し他のチームとザックバランに交流する機会、「私たちのチームはここが大変で」とか「今こういう活動していて」みたいな、本当にザックバランな話し合い、意見交換ができるような場がチーム単位であると良いと思った。
- ・全体会の時に自分のチームメンバーとしか関わりがないっていうのを改善してほしいなと思っている。
- ・プロジェクト演習内でのチーム同士の横のつながりをもうちょっと増やした方が良いと思っている。まず「情報交換会」を絶対にやった方が良い。他チームの活動がぼんやりとしかわからない。それはちょっともったいない。もっと仲良くなる余地とか互いの活動をブラッシュアップする余地が発表会のフィードバックというかたち以外にもあるのではないかなと思った。横のつながりというのは、ゆるくやっても良いと思う。
- ・他のチームと交流する機会があると記録の取り方などを改善できた。私たちのチームはこういう形でやっているとというのが情報共有できたらそれぞれのチームが良い方向に向かうこともあるのではないかなと思った。
- ・チーム同士のつながりがほしかったなっていうのはちょっと思った。年度末発表会で、たとえばあるチームが会議に出てこういうことを主張したとか、別のチームの成果物がこういうものだったというのはもちろん聞いた上で理解はできたが、そこからこういう学びがあったとか、実はこういうストーリーがあったとか、こういう苦労があったとかというのは聞いてみないと分からないことだと思うし、他のチームと交流ができれば良かったなと思った。我々の動きとしても他のチームと交流ができれば良かったなと思った。
- ・横のつながりがあると良いなって。授業を取っている人同士仲良くしたいなと思っていたので、座談会とか情報共有会みたいなのがあったら面白いなあ、とは思っていた。
- ・チーム同士仲良くできる機会があったり、それに関連して他のチームが我々のフィールドへ来たり、他のチームのフィールドに僕らが行ったりということがあったら良いと思う。
- ・前年度のメンバーとの交流ではないけれど、前年度のメンバーとうまくコミュニケーション

がもっと取れると良いのかなとは思った。1回でもそういう機会があっても良いのかなという、自分たちのチームは「この時期こんな感じで活動していたよ」みたいな「これはこうしていたよ」といった交流ができる機会があれば、結構、参考にはなると思う。

5-3. 転チームの提言

履修学生からはさらに転チームの提言も見られた。教員は一度決定したチームの所属変更の可能性について検討したことはなかった。しかしながら、いったんチーム決定したものの、チームの「風土」に合わないことも考えられる。また、他チームのチーム運営の方法やノウハウを学ぶという点からも「転チーム」は検討する必要がある。また、本授業が社会人基礎力養成という授業目標を持つという点からも「疑似社会経験」としての「転チーム」は考慮に値すると考えられる。

- ・転チーム制度、各チームで入れ替えを行うことを協議することで チームメンバーがそちらへ移籍することが認められたら良いと思う。イメージインターンのような感じで、ちょっとだけそのチームに参加しますよっていうのがあると社会経験としても面白いのではないかな。
- ・やはりチームを変えるという「転チーム」を1回、1・2回、許すべきと思っている。チームになじめなかったり、全然うまくやっていけないということもあったりして、その状況で転チームさせないのもどうなのか。
- ・最初にチームを選ぶときにもあまり情報がなかった。「えっ、もうチーム決めるのですか、僕ここでやりたかったから良いのですけど」というノリでやったのだけど、それ以外の人たちからするとこの活動ちょっと面白そうだなっていう時に、たとえばそのチーム同士で移籍について話をつけるとか、「こっちに移籍したいです」というような、要は社会人基礎力を身につけるっていうのだったら転職みたいな練習もしても良いのではないかなと思う。「今の時代は転職がすごくありますね」という感じで、そういうところで横のつながりはもうちょっと緩やかにしても良いのかと思った。

5-4. 引継ぎと後輩の育成

プロジェクト演習は当該年度に集まった学生が大学外部からの課題提案、学生自身の提案に基づいて「単年度単位」で行う授業である。学生が複数年度にまたがって履修するケース、履修学生が途切れることなく継続することで長く存続してきたチームは存在するものの、それはあくまでも「結果」であり、教員としては特に後輩の育成について配慮を行わなかったし、これまでの授業実践のなかで後輩の育成について学生からの要望を受けたことはなかった。今回、活動の継続を前提とした後輩の育成や引き継ぎについて要望が出たことはコロナ禍の影響も大きいと考えられる。すなわち、通常であれば、サークル活動などで後輩との接点や関わりを持てるものの、この3年間それらを持つことができなかった。こうした学生生活の不全感のあらわれと考えることができる。

- ・引継ぎが、メンター制度があるのですが、これもチーム単位で全部全員に「こういうふう

ないかなと思う。

- ・後輩育成ってところがどうしてもあるのかなってというのは考えていて、せっかく、継続できるチームが多いのになくなってしまふのはもったいないし、やはりまずは「続けていく」ところが大事というか、まずは後輩がいる、その後輩がたとえちゃんとやらなくても次の人がいる、「いる」っていうこと自体がすごく大事で、中身の成果はどうでもよくて、後輩が「いる」ということが大事だと思う。
- ・後輩を呼べる仕組みにできたらと思う。3つの地域志向プログラムのなかで、プロジェクト演習をどのように選んでもらおうかということ考えた時に発表会に参加してもらって見てもらうのが良いかなと思う。次に広報動画。このチームはどんなのだったのかもう少し活動について広報動画を見られる機会があっても良いかなと思う。

5-5. 授業の形式や内容に関する要望

チーム学生数の違いによる負担の不公平感が存在すること、学生間や学生と教員間の連絡等といういわばシャドウワークが負担感につながっていることも明らかになった。学生の主体的な活動の重視は教員が教室で行う授業と異なり、さまざまなシャドウワークを生む。ここでいうシャドウワークは授業活動遂行上必須だが、それらのワークの負担が他のチーム学生や教員に認知されにくく、それゆえに評価されないというような活動を指す。教員としてはこれらの業務をいわば「当然の活動」とし、学生の負担感となっていることについて配慮することはこれまでなかった。

- ・チームの学生数で、多いところは8人、私たちは5人という人数の差があったので人数の差をもう少し幅を狭くしてもらいたいと思う。個人がやりたい活動もあると思うので、その意志を無視するのは良くないと思うが、あと1人ぐらいいてくれた方が助かった。
- ・メールの負担について渉外担当を増やす。メールでたとえばチームのメンバーの1人に来てしまうメールがあった。せめて複数人に送ってもらった方が、プレッシャー、負担が軽減されると思った。
- ・連絡係というか、リーダーの負担をもう少し減らせるような仕組みを作ってほしいと思う。具体的にはメールでリーダー宛てではなくてCC：に自分を入れてくれたら全然反応するので、そういった工夫がほしかったなと思う。

6. PBL 授業の発展的展開に向けて

これまで学生へのインタビュー調査の結果を鳥瞰してきたが、今回の調査ではPBL 授業が胚胎する新たな問題点や課題を抽出できた。これらを踏まえてPBL 授業の発展的展開に向けて、大まかに3点について具体的提案を示したい。

- (1) 学生に提示する課題が複数存在する場合(いくつかのチームが存在するような)場合、課題説明には十分な情報を与える必要がある。また、チームの所属の意志決定に際しても十分な時間を与える必要がある。

- (2) 学生個々人の生活時間や1年間の授業スケジュール、インターンシップ等への配慮を行う必要がある。授業開始時に学生が希望するチームで予想される作業負担量と本人がPBL授業に割ける時間や授業への熱意との「調整」を行う必要がある。場合によっては他チームへの移籍などを勧めることも考慮する。
- (3) 授業外の「シャドウワーク」への配慮。目に見えない活動への学生の負担への正当な配慮を行う必要がある。

これらの提案の解決は教員のみが行うものではない。前述したように学生から他チームとの交流についての強い要望があった。学生たちは「私たちのチームはここが大変で」というような「意見交換」ができる場としての「情報交換会」を強く要望している。この情報交換会的な場の充実はこれまで明らかにしてきたPBL授業の問題や課題を学生自身が解決できる場として機能させることにつながるだろう。そしてそれは学生の主体的な活動を活動の中核とするPBL授業のもうひとつの重要な教育活動と位置づけることもできるのではないかと考えられる。(岩佐淳一)

まとめ

2022年度はコロナ禍3年目となり、プロジェクト演習において、学期末に行う授業のインタビュー調査もこれで3回目となった。学外協力者の皆様から学期初めに示された、地域に関わる諸課題に対し、今年度もすべての学生チームが成果物を提出できたので、地域連携の観点からは本授業の目標はほぼ達成されたものと言える。他方、授業の本来の目的である「学び」はどうであったか、履修学生の声に耳を傾けた。

分析にあたっては、授業改善に力点を置くため、プロジェクト演習に対して学生が指摘する不満や問題点に絞って精査することとした。その結果、学期初めに選択課題を比較検討する方法、学期を通じて授業時間外の広義での「学習」時間が多いこと、チーム構成員相互の活動量の差とそれに起因する不公平感などの点が浮き彫りとなった。感染症が沈静化し、対面での授業やフィールドワークが徐々に復活する中、オンライン特有の問題点ではなく、PBL授業が持つ本質的な問題点を改めて考え直す必要性に思い当たったのである。今後、感染症が収束に向かい、形の上ではコロナ流行以前の平常な授業形態に戻ることが予想されるが、単なる復旧にとどまってはならない。コロナ禍に左右された過去3年間に得た知見を有効活用しつつ、初心に帰って授業内容を再検討することで、より充実したPBL授業が行えるよう努めていきたい。(神田大吾)

注

- 1) 鈴木敦・岩佐淳一・神田大吾「コロナ禍における地域連携PBL授業-人文社会科学部「プロジェクト演習」の対応と学生の評価-」『茨城大学教育実践研究』40号、茨城大学全学教職センター、2021。
- 2) 岩佐淳一・神田大吾・鈴木敦「コロナ禍における地域連携PBL授業(2)-2年目の学生評価/インタビュー調査から-」『茨城大学教育実践研究』41号、茨城大学全学教職センター、2022。